



ゲーメの神秘思想とソロヴィヨフ(二)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-05-10 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 福島, 正彦 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00004636

ベーメの神秘思想とソロヴィヨフ (二)

福 島 正 彦

五 (承前)⁽¹⁾

J. ベーメと同様に、性愛の神秘的性格を明らかにしようとする試みるウラジーミル・ソロヴィヨフは、一八九二年より一八九四年にかけて、一括して『愛の意味』と題する一連の論文を発表した。⁽²⁾その内容は、ソロヴィヨフ研究者によって、「愛の哲学」と名付けられ、「ロシアの形而上学と詩作にとって、この哲学は大きな意義をもってきた」と評価されている。⁽³⁾「愛の意味」に関するソロヴィヨフの論文は、彼のあらゆる著作の中で「最も注目に値するもの」であり「エロス―愛に関して、キリスト教の思想史の中で語られた唯一のオリジナルな発言でさえある」と評価したベルジャーエフのコメントは、近年に出たドイツ語訳中の解説文の冒頭に引用されている。⁽⁴⁾

このソロヴィヨフの『愛の意味』は、原題では *Unser Augen* (愛の意味あるいは愛の意義) であるが、ドイツ語訳全集第七巻に

収録された訳語では「性愛の意味」(Der Sinn der Geschlechtsliebe) となっている。⁽⁵⁾このドイツ語訳は、原題の直訳ではないが、著述の内容を的確にとらえて訳したものとして、実に正鵠を得ていると思われる。なぜなら、ベーメが対話形式で説いた「乙女ソフィア」(Die Jungfrau Sophia) と「魂」(die Seele) との相互愛のあり方が、この世のものならぬ単なる精神的憧憬ではなく、ソフィアは、神から魂に与えられた「花嫁」であり、魂は高貴な「花婿」であって、両者の愛は、「輪舞」「抱擁」「接吻」「結婚」というような性的関係を伴う結合であったように、ソロヴィヨフの『愛の意味』も、決して抽象的な精神的純愛論を展開したものではないからである。それは、ベルジャーエフが指摘するように、「エロス―愛」を論じたものであり、異性間の身体的結合を伴う「愛」―性愛⁽⁷⁾について、神秘主義的観点から考察を加えたものである。

ソロヴィヨフにとって最も強い関心を呼ぶ具体的な愛は、男性的

なものと女性的なものとの相互透人と相互補充において成り立つ性愛であり、それは、ベームと同様に、どこまでも「この地上的生命の存続するときに」「この危険な地上的生活の中で」成就されうる⁽⁸⁾身体的結合―婚姻のイメージとつながるものである。しかし、この身体的結合は、このことも、ベームの場合と同様に、決して単なる動物的生殖行為を意味するのではない。「愛」の名に値する人間の男女間の性的結合は、動物を含む生物界全体の「類」的増殖の営みとは峻別されなければならない。ベームが、悔悛した「魂」と「乙女ソフィア」との対話形式によって語った性愛の神秘的性格を、ソロヴィヨフは自然界における有機体の増殖、生殖現象の分析から始めて、最後には、男性的原理と女性的原理との真実の結合を「神が人間を造った神秘的な神の像」⁽⁹⁾(cfr. 41)に関係づけることによって、明らかにしようと試みるのである。

六

ソロヴィヨフが「愛」の神秘的性格を明らかにするために、まず始めに分析の対象として取り上げるものは、有機体における「類」の増殖現象である。性愛の意義は、通常、それが有機体の類増殖という自然目的のために手段として役立つ、という点にあると考えられている。しかし、ソロヴィヨフによれば、性愛を手段化するこのような見解は、「自然史的な事実に基づいて」誤りである(cfr. 3)。

なぜなら、性愛が生物一般の類増殖という目的のための手段として必然的であるならば、性愛の営みなくしては生物の増殖はまったくありえないことになるであろう。しかし、事実はこれと相違している。生物の増殖は性愛なくしても生じうるのであり、増殖は性への分化そのものがなくとも起こりうるのである。植物界並びに動物界のかなりの部分は、非・性的な仕方、例えば分化、細胞分裂、胞子生殖、接枝、単性生殖などによって増殖しうる。このようないわゆる下等な有機体に見られる増殖形態を度外視し、高等な有機体は性的結合という手段によって増殖する、ということを一「一般的規則」(cfr. 3)として規定するとしても、この性的要因は増殖そのものと結合しているのではなく、高等な有機体の生命の増加と結合しているのである。従って、性的差異と性愛の意義は、類的生命一般や、類的増殖を目的とする手段の内に存するのではなく、高等な有機体の生命そのもの内に求められねばならない。

性的要因は高等な有機体と結合していることを確認するものとして、ソロヴィヨフは、脊椎動物の下部段階から、有機体の最高段階―人間に至るまでの性愛と類的増加の関係を挙げていく。魚、水陸両棲類、爬虫類、鳥、哺乳類、人間と進むにつれて、類的増加の数が減少し、性的愛着は逆に増大してゆく。性愛と類的増加との関係は、一方が強力になればなるほど、かえって他方は弱くなる、とい

う「逆関係」である (Gmp. 4)。性的愛着は、有機体の完成度と正比例し、増殖力と反比例するのである。人間においては、最も強力な性愛が受胎の意識的排除によってさえ可能である。しかし、このようにして有機体の両端において、一方では性愛なき増殖、他方においては増殖なき性愛が見出されるとするならば、性愛と類的増加の両現象は、互いに裂きがたい結合をなすのではなく、各々が「自立的意義」(Gmp. 5)をもっているものであり、一方の意義は他方の単なる手段であるという点に成り立つのではない。——このように、自然界の実証的考察に基づいて、ソロヴィヨフは主張している。

七

性愛の自立的意義を主張するソロヴィヨフは、この意義を否定する見解——性愛を「世界意志」「生への意志」「無意識のないし超意識的世界精神」(Gmp. 5)などが立てる目的達成への単なる手段とみなす形而上学的見解——を批判している。このような見解によれば、「世界意志」は類の保存を目指すのみならず、歴史的過程として理解される人類の内に、人間的本性の高揚と完成化をなしうる模範的存在の産出を目指している。世界意志はできるだけ重要な個体が生まれることに関心を抱くのである。ここで問題は、人類における子孫一般の産出のではなく、世界意志の目的に最も有益な、この限定された子孫の産出である。そのためには、一定の人が異性の

一定の人にとって心を惹きつける特殊な力をもち、何か特別の独自なもの、最高の幸福を与えうるもの、として現われてこなければならぬ。まさにこれが、性的本能に基づく愛情であるが、これは、人々の個人的意識によるのとは異なった独自の目的のために、彼らの内に情熱的に生まれ、不合理な運命的情熱として人々を支配するのである。——ソロヴィヨフは、彼が拒否する形而上学的見解の「一般的本質」(Gmp. 6)を、おおよそ右のようにまとめて述べている。

しかし、ソロヴィヨフによれば、このような思弁的世界意志説はまったく誤りである。なぜなら、もしもそれが正しいとすれば、一定の男女の性的情熱と、それによって生まれる子孫の歴史的重要度は、とは、正比例的に対応していなければならないであろう。愛情が、要求される卓越した子孫の産出のために世界意志によって刺激されるもの、そのような子孫産出のための単なる手段として生じるもの、にすぎないとすれば、世界意志によって使用される手段の力はこれによって達成される目的と釣り合っていないなければならないであろう。世界意志が、世に現われるであろう子孫の産出に関心を抱くことが大であればあるほど、世界意志はいっそう強く二人の運命的な産出者を互いに結び合わさなければならないであろう。歴史的過程にとって巨大な意味をもつ天才の誕生が重要である、と仮定して

みよう。世界意志説が正しいとすれば、この最高の意志は、偉大な天才が通常の人間たちと比べて数少ない稀な現象であるだけに、いっそう大きな関心をこの天才の誕生に対して抱かなければならないであろう。希少価値には、その産出と維持のために、より大きな配慮が寄せられてしかるべきものである。従って、世界意志にとつて重要な目的の達成を保証する性的愛着は、通常のものよりもいっそう強く激しいものでなければならぬであろう。要するに、世界意志説が正しいとするならば、従って、この意志が何らかの人間の誕生に著しい関心を抱くものであるとするならば、それは望まれる結果、目的の達成、を保証するために、きわめて強力な方策を採用しなければならぬであろう。従ってまた、世界意志は二人の産出者の内に、彼らの結合を妨害する一切のものを粉碎しうる強い情熱を刺激しなければならぬであろう。しかし、現実には、このような世界意志説の結論とはまったく異なった事態を示すのである。

現実が示す事態は、両性間の激しい愛情と歴史的に重要な子孫との間には、いかなる「相互関係」(cp. 7) も見出されない、というところである。世界意志にとつて完全に説明しがたい事実として、ソロヴィヨフは最も強い愛がしばしば報いられず、偉大な子孫を生み出すどころか、まったく何の子孫も生まない場合がありうる、ということを指摘する。激しい愛情が報いられなかったために、出家

したり自殺したりする人々が存在するとき、子孫に関心を抱く世界意志はいったい何のために尽力しているのか。『若きヴェルテルの悩み』の中で、ゲーテはシャルロットに対するヴェルテルの愛情を美しく描いたが、不幸にもこの愛情は報いられなかった。⁽¹¹⁾ 失意のヴェルテルが、たとえ自殺しなかったとしても、彼の不幸な情熱は有能な子孫を目指す世界意志の目的論にとつて、不合理な「謎」

(cp. 8) に留まるであろう。世界意志は、自己の合目的関心に従って、愛しあう者たちを結び合わす努力をする代わりに、まったく逆に、あたかも故意にこの結合を妨げようとしているかのようであり、自己の課題は、愛する者たちから子孫産出の可能性そのものを奪おうとしているかのようである。ソロヴィヨフは、この場合を含めて、次の四ケースを提示している。(一) 一方の激しい愛が、他方にまったく受け入れられずに留まる。(二) 相互に激しい愛が悲劇的な結末に陥って、子孫の産出に至らない。(三) 激しい愛が成就するとしても、子孫に恵まれない。(四) たとえ子孫に恵まれたとしても、この子孫がまったく平凡な人物であることが多い。これらの事例から帰結することは、要するに、性愛の意味を合目的生殖に見るといふ見解は、現実性をもたぬ単なる「仮象的理論」(cp. 6) にすぎず、それは正しい説明ではなく、これを拒否するものに他ならない、というのである。

八

人間以外の動物にとっては、類の生命が個体の生命を決定的に圧倒するのであるから、個体の生命の「最高の花」(ср. 12)としての性愛は、選択、競争、戦闘によるいっそう完全な有機体の産出のための手段として役立つにすぎない。しかし、人間においては、個体の生命は類の維持手段ではなく、性愛は有機体の増加のための道具ではない。個性性は、人間の場合、唯一性と自立的意味をもってするのである。その理由として、ソロヴィヨフは個人の「絶対的尊厳」の確信を挙げる。各人は、人間に固有な「理性的意識の絶対的形体」をそなえ、普遍的な理念・規範との関係によって一切の事柄を評価する能力を有し、真理を認識し理想を実現する可能性を秘めている(оп. cit.)。各人が「絶対的全一性」の生きた反映であり、「全宇宙的生命」の意識的で自立的な器官でありうる(ср. 14)。各人は無限の完成への潜勢力(可能性)をもっており、自らをどれほど高く評価しても評価しすぎることがない「無条件的・交替不可能なあるもの」なのである(ср. 16)。

個人の絶対的尊厳性を確信するという、ソロヴィヨフのこの主張は、「各人は自己の内に神の像すなわち絶対的内容の独特の形を含んでいる」(ср. 27)という彼の神秘主義的人間像の上に立てられている。そして、この人間像は「神が人間を創造した日、人間を神

の像に従って創造し、彼らを男と女に造った」という「創世記」の記述に依拠している(ср. 4)。個人の自立的、無条件的価値は、人間が「神の像」を「独特の形」で、すなわち男性的形姿ないし女性的形姿において含んでいる、という信仰の上に成り立つとするのがソロヴィヨフの見解である。しかし、このような個人の絶対化は、人間の傲慢性を助長し、エゴイズムを正当づける危険性がないであろうか。

この問いに対して、ソロヴィヨフはエゴイズムの虚偽について語り、それは個人の絶対的自己意識と自己評価の内にでなく、自己には無条件の意義を帰し(これは正当である)、他者に対してはこの意義を不当にも拒否することの内に存する、と指摘する(ср. 16)。自己の内に無条件の価値を認めること自体は、決してエゴイズムではない。ただ同等な絶対的価値を他者に対して認めず、相対的な利用価値、手段的価値のみを他者の内に残す態度が、エゴイズムの虚偽なのである。人々は、抽象的理論的意識においては、このような誤謬に気付き、常に自己と他者との完全な平等の権利を認めるであろう。しかし、問題は、生きた具体的意識と実践的態度にある。ここにおいては、人々は通常、自己と他者との無限の差異、完全な通約不可能性、非透入性を確信している。このような排他的自己確信が存続する限り、エゴイズムを打ち破ることはできないであろう。

ソロヴィヨフによれば、エゴイズムを根本的に打ち破ることができ「唯一の力」は、性愛である。性愛は、抽象的理論的意識においてでなく、内的感情と実践的な生ける意志において、自己にとつての他者の無条件な意義を我々に認めさせる力をもっている。性愛において我々の全存在を貫き、この全存在の一切のものを捉えている力のみが、かたくなな排他的力に対抗しうる。我々がエゴイズムの束縛から解放されるためには、我々と同じ本質的内容をすべて有し、「同種のそして同意義ではあるが、形からみて全面的に異なる二つの存在」の出会い、互いに補充し合う「完全な相互作用と交渉」いわば両者の「化学的結合」が生じなければならない（*стр. 19*）。

性愛以外の他の愛、例えば親子間の愛、母性愛、人類愛、学問・芸術への愛、真実愛においては、性愛におけるような「愛するものと愛されるものとの間」に、同一世代、平等、相互作用および互いに補充し合う個性間の「全面的差異」（*op. cit.*）と、両者の人格的・全面的「一体」化（*стр. 22*）が欠けている。性愛においてのみ、自己と他者との完全な一体化が可能であり、他者の無条件的意義を単に抽象的意識においてでなく、具体的実践的態度の中で認め合うことが可能となる、というのである。

このように男女の相互補充と人格的一体化とを可能にする性愛のイメージは、ソロヴィヨフに従えば、神によって造られた人間が潜

勢の可能性としてもっている「神秘的な神の像」に由来している。「男と女との真実の結合」は、この「神の像」と「根源的に関係している」（*стр. 41*）。夫と妻との関係は、二つの性的に異なった、等しく不完全な可能的「潜勢力」（*Потенция*）の、ただ相互作用と相互補充の過程を通してのみ、完全な現実性に到達しうる関係である（*стр. 41-42*）。このような相互補充の関係で結ばれている男女は、「神の力の媒介者」としてはたらく「構築的原理」である。各人が、自己の性愛の生きた対象と協働して構築する「神の像」は単に男性的なものに留まるのではなく、女性的なものをも含む両性具有的存在である。根源的存在としての神は、男性的なはたらきと女性的なはたらきとの未分化の二者であり、真の性愛によって結ばれた男女は、この二者の分化と区別の過程を通して生まれた二つの性的に異なる不完全者の相互補充によって、根源的の二者としての「神の像」を「復興する」のである（*стр. 24*）。性愛の「神秘的根源」*Мистическое начало*（*стр. 38*）あるいは「神秘的基盤」*мистическое основание*（*стр. 48*）といわれるのは、この「神の像」である。

九

性愛の「神秘的根源」について、ソロヴィヨフがこのように語るとき、その背景には明らかに彼独自の聖書解釈と信仰が存在している。「愛の意味」の第四論文、第五章および第六章がこのことを示

しているのです、ここにその内容の要点を記しておくことにする。彼は新・旧約聖書の語句「神が人間を創造した日、人間を神の像に従って創造し、彼らを男と女に造った」⁽¹²⁾「この神秘は偉大である。われはキリストと教会とにおいて語る。⁽¹³⁾」を冒頭にかかげた後で、おおよそ次のように述べている。

…男と女との真実の結合は、神が人間を造った神秘的な神の像に根源的に関係している。神が自分の創造に関係するように、そしてキリストが自分の教会に関係するように、夫は妻に関係する。夫は能動的原理を、妻は受動的原理をあらわしているが、我々はここで、使徒が語っている〈偉大な神秘〉を考慮に入れなければならない。この偉大な神秘は、人間の関係と神的関係との本質的アナロジーをあらわしている。なにしろすでに、キリストによる教会の創造が神による宇宙の創造そのものと区別されているのであり、神は宇宙を無から、すなわち、存在の純粹の潜勢力あるいは空から創造し、この空が続いて充満される、すなわち神のはたらきによって叙智的事物の實在的形体を受け取るのである。これに対してキリストは教会を、すでにさまざまに形成され息づいており、自らの部分において自立している素材から、創造するのであり、この素材に新しい精神の生命の原理が、統一の新しい高次の領域において、伝えられねばならないのである。同様に夫は、自分の創造的行爲のために、妻の

人格の中に素材をもっているのである。神は生物に対して、全体が無に對するように、すなわち存在の絶対的な充実が存在の純粹な潜勢力に對するように、関係する。キリストは教会に對して、實現された完全性が、現実的完全性へ向かうように形成された完全性の潜勢力に對するように、関係する。夫と妻の関係は、二つの異なつたはたらきをするが、等しく不完全な潜勢力の、ただ相互作用の過程によつてのみ完全性に到達する潜勢力の、関係である。換言すれば、神は生物から自分のために何も受け取らない、すなわち、自分に對していかなる増加もせず、すべてを生物に与えるのである。キリストは教会から完全性の意味でのいかなる増加も受け取らないで、すべての完全性を教会に与えるが、しかし、このかたは教会から充実の意味での増加を受け取るのである。夫と妻は相互にお互いを現実的な意味においてのみならず、理想の意味においても、補充しあい、ただ相互作用によつてのみ完全性に到達する。人間は神の像を自分の愛の生きた対象の中に、ただそれと同時に自分自身の内にこの像を復興するという仕方のみ、構築的に復興することができる。しかし、このために、彼は自分自身には力をもっていない。なぜなら、もしもっているなら、復興は必要ないだろうし、自分にもっていないなら、神から受けとらなければならないからである。従つて、夫は自分の女性的補充に關してそれ自体においてでなく、神の

力の媒介者あるいは案内者として、創造的、構築的原理なのである。キリストも同じ神の創造的力によって、創造するのであり、このかたはこの力を、本性上現実に (actum) もっており、我々は恩寵と摂取によって、自分の内にただその力の受容のための可能性(潜在力)をもつにすぎない。

真実の愛のわざは何よりも信仰の上に基礎づけられる。愛の根本の意味は、すでに示されたように、他の存在者に対して無条件の意義を認めることに成り立つ。しかし、自己の経験的な、現実的感情的知覚に属している様相においては、この存在者は無条件の意義をもっていない。それは自らの価値において不完全であり、自らの存在において一時的である。従って、我々はこの存在者に対して無条件の意義を信仰によってのみ確信することができる。信仰は希望されるものの知らせを確信し、見えざるものの顕示を確信することである。我々是我々の愛の対象の信仰ということのもとに、愛の対象が神の中に存在し、その意味で無限の意義をもっているということの確信だ、ということを理解しなければならぬ。勿論、自己の他者に対するこの超越的關係、他者を神性の領域へ思想的に移すことは、自己そのものに対する同じ關係を、自己を絶対的領域へ同様に移し主張することを予想している。他者に対して無条件の意義を認めること、あるいは他者を信じること(これなしには、真実の愛は

不可能である)を、私はただ、他者を神の内にあると確信すること、従って、神そのものと、神の内自己の中心と根をもっている者としての自己を信じること、によってのみできるのである。この三一的信仰は或る内面的行為であり、この行為によって自己と他者との真実の再結合への第一の基礎が、そして両者の内に三位一体の神の像の復興が据えられるのである。時間と場所の現実的条件の中でこの信仰の行為は、祈りである。この關係における自己と他者との破り得ない結合が、現実的結合への第一歩である。この一歩はそれ自体としては小さいが、これなしには、更にこれ以上の、より大きいものは何もありえないのである。

永遠にして分割しがたい神にとっては、すべては共に一挙にあり、すべては一つのもの内にあるがゆえに、何らかの個体的存在者を神の内確立することは、この存在者を区別性においてでなく、全体の内、あるいは一層正確には——全体の一性の内——確立することを意味している。しかし、この個体的存在者は自己の与えられた現実性においては全体の一性の内に入って行かず、物質的な特殊な現象として区別されて存在しているゆえに、我々の信仰する愛の対象は必然的に、我々の本能的愛の経験の対象とは区別される、ただしこの対象と分離しがたく結合されてはいるが。これは、存在の二つの区別される相における、あるいは存在の二つの異

なる領域——理想的と現実的——における同一の人格なのである。

前者は差し当たり単なる理念である。しかし、真実の信仰する、見る目を具えた愛においては、この理念は我々の気ままな捏造でないこと、それは対象の真実を表現しているのであって、ただ外的現実的現象の領域には未だ表現されていないだけであるということ、を我々は知っている。この理想的領域に属する人格、あるいは人格化された理念は、これらの人格化の各々の中に分かれたれずに現存している全一性の人格化にはかならない。こうして、我々が愛される対象の理想的形体をおもうとき、この形体のもとに全一的存在そのものが我々に伝えられるのである。さて、我々はこの存在をどのように考えなければならないか。∴ (Ср. 41—42)

この存在、全一的存在、をソロヴィヨフは、男性的なはたらきと女性的なはたらきとを未分化の内に統合している一なる神であることみなし、ここから可能的潜勢力としての女性的なはたらきが区別されて現われてくると考えている。彼は、この女性的なはたらきが、一者としての神と不可分離のものであると考え、次のように述べている。「神は一なるものとして、自己から自己の他者を、すなわち自己自身でないものすべてを、区別し、このすべてのものを共に一挙に絶対的で完全な形体で自己の前に立てる「表象する」ことにより、すべてのものを自己と結びつける。この他の一性は、神の最初

の一性から分離されないが、区別されたものであり、神との関係で受動的女性的一性である、なぜなら、ここで永遠の空(純粹の潜勢力)が、神的生命の充実を受け取るからである。」(Ср. 45)

結 び

以上、ベーメの「ソフィア」神秘思想と共通するソロヴィヨフの性愛論を考察してきた。男女の真的性的結合のあり方は、動物的な類の増殖や、いわゆる官能的享楽や思弁的形而上学的な営みではなく、男性的なものと女性的なものの差異をもつ二つの平等な人格が一なる神の自立的・無条件的価値を担う潜勢力として互いに協働し、相互に補充し合って、「各人が他者の中に自己自身の生命の充実を見出す」はたらきである。ソロヴィヨフは、このようなはたらきによって成就する関係を「シジギチェスキーな関係」(Связи-связи-связи)と名付ける(Ср. 57)。「シジギチェスキー」という語はギリシャ語の *συζυγία* (結合) に由来するものであるが、ソロヴィヨフはこの言葉に彼独自の意味を付与し、それは互いに異なり、性的に区別されてはいるが、平等の権利と等しい価値・尊厳をもった自立的な存在が、最も緊密な相互補充において形成する生きた結合関係、という意味で用いている。いうまでもなく、このような意味の人格的な結合関係の形成は、それへの潜勢力(可能

性)は男女双方の内に具わっていると考えられているが、現実の我々の中では容易なことではない。そのことを十分わきまをきかなくてはならぬ、ソロヴィヨフは自他の非透入性と排他性の克服について言及しなければならなかったのである。我々が非透入性を克服し、全一者の理念に適合するということは、抽象的概念としては簡単であるが、具体的実現という点では「複雑で困難である」とソロヴィヨフは述べられている(срр. 57)。しかし、難事ではあつても、それは実現への可能性を排除しない。真の人間の関係の形成は、その成就への潜勢力を与えられている我々に、常に課せられているものである。

註

- (1) 本稿は、前稿(ミーメの神秘思想とソロヴィヨフ(一))「人文学論集第八集所収」を受けている。前稿においては、ソロヴィヨフの一八七七年四月二十七日付の書簡中に述べられているミーメ言及を手がかりとして、ミーメの「ソフィア」神秘思想の紹介をおこなひ、これとソロヴィヨフの性愛論との共通性を指摘した。

(2) В.С.Соловьев, *Смысл любви, Статьи первая* (предварительная замечания), статьи вторая, третья, четвертая, пятая.

(1)

- (3) Schlußwort des Übersetzers, In : Deutsche Gesamtausgabe der Werke von Vladimir Solowjew, 7 Band, Erichewel Verlag, 1953, S. 434.
- (4) Ludwig Wenzler, Einleitung : Leidenschaft, die Glaube wird. Vladimir Solowjew's Philosophie der Liebe. In : Vladimir Solowjew, *Der Sinn der Liebe*, Philosophische Bibliothek Band 373, Felix Meiner Verlag Hamburg 1985, S. VII.
- (5) Deutsche Gesamtausgabe der Werke von Vladimir Solowjew, 7 Band, Erichewel Verlag, 1953.
- (6) Jakob Böhme, *Der Weg zu Christo*, Von wahrer Buße, Kap. 45—51. 人文学論集第八集三四頁。
- (7) Nikolai Berdiaev, *Die russische Idee*, 1982, S. 169. In : Vladimir Solowjew, *Der Sinn der Liebe*, Phil. Bibl. B. op. cit.
- (8) Jakob Böhme, op. cit. Kap. 49.
- (9) Собрание сочинений В.С. Соловьева в 3-м издании и авторграфом. Под редакцией и с примечаниями С.М. Соловьева и З.Д. Радова, Второе издание, Том седьмой (1892-1897), Перебор, Смысл любви (1892-1894). стр. 41. なお、今後この書からの引用は全ひ本文中に стр. の略号を用ひて頁数をなす記入す。

(10) ソロヴィヨフがここで念頭に置いているのは、ショーペン
ハウアーとエドゥアルト・フォン・ハルトマンの見解である
(*opn.* 6)。

(11) ソロヴィヨフは、自己の見解を説明するために、古典的な文
学作品からの例を多く挙げるが、これらは實際生活に見られる
個別的現象ではないけれども、現実の事態を見事に示す一般
的範型として、いっそう優れた例である、とことわっている
(*opn.* 7)。強い相互愛が報いられず、偉大な子孫のみか、子孫そ
のものをさえ残すことなく終わった例としては、シェイクスピア
の悲劇『ロメオとジュリエット』が挙げられている (*opn.* 8)。

(12) 創世記、第五章第一—二節参照。

(13) エペソ人への手紙、第五章第三—二節参照。

——西洋文化講座教授——